

豊橋市美術博物館友の会だより

-2009年-冬号 Vol.74

FU風伯HAKU
Winter 2009



開館30周年記念シンポジウム 「魅力ある美術館とは」

去る11月3日、盛況のうちに終了した上記シンポジウムの開催までのいきさつやパネルディスカッションの概要、参加された方の感想などをお届けします。

〈第1部〉 基調講演 「私の空想美術館」 真野響子さん(女優)

〈第2部〉 パネルディスカッション 「魅力ある美術館とは」

パネリスト◎真野響子、滝沢具幸(飯田市美術博物館館長)、増田幸雄(浜松市美術館館長)、

金原宏行(豊橋市美術博物館館長)、神野吾郎((株)サーラコーポレーション代表取締役)

コーディネーター◎富山秀男(美術評論家)

私の空想美術館 —真野響子さんをお迎えして—

須見テル子(友の会30周年記念事業実行委員長)



基調講演をする真野響子さん

真野響子さんは、じつにエネルギッシュな人だ。最近の真野さんは、08年12月、随筆家・白洲正子の没後10年を追悼する新作能「花供養」に、アイの語り手として宝生能楽堂に登場。平成の白洲正子になったのである。また同年、「巨匠ピカソ展」にちなんだテ

レビ朝日の特別番組でピカソについて熱く語っていた。今年10月には、東京都美術館の「冷泉家 王朝の和歌守展」で真野さんと朝日歌壇選者の佐々木幸綱氏との特別対談があり、俊成84歳の歌論書「古来風林抄」が大好きだとおっしゃっていた。さらにNHK教育テレビ「日めぐり万葉集」の選者をつとめ、山上憶良の「憶良らは今は罷らむ 子泣くらむ それその母も 我を待つ」を取り上げている。そして、美術館連絡協議会ニュースの100号記念エッセイでは、「美術館があったから死なずにすんだと言ってもいい。死にたくなるほど打ちのめされたときに、どれほどの作品に救われたか知れない」と、美術館と共に育った一市民として、ご自分を語られた。NHK「日曜美術館」の司会をつとめられたことは周知のとおりだが、女優のほか文化人としても多方面で活躍される真野さんに、ぜひお話をうかがってみたいとの思いからこの企画はスタートした。

話は前後するが、美術博物館の開館30周年を記念し、友の会との共催でシンポジウムを開催する計画が昨年持ち上がった。「魅力ある美術館とは」をテーマに、基調講演とパネルディスカッションで構成。講師には芸術に造詣が深い真野響子さんをお招きしたいということになり、無理を承知でお願いをしてみる。多忙なスケジュールにもかかわらず、「私でお役にたつのであれば」と、快いお返事が返ってきた。ちょうど1年前の11月のことである。

年が明け今年の1月、館の喫茶店で雑誌を読んでいると、『婦人画報』新年号に、真野さんが「私の空想美術館」というテーマで連載を持ち、館長を1年間つとめるとある。なんとタイミングの良いことか。どんな作品が選ばれ、どんな解説が添えられるのか楽しみにになった。第1回は、白洲正子所有の面「是閑の増女」(現在は梅若家に寄贈)であった。

準備に入ってからの日日は早いもので、すぐにシンポジウムの日がやってきた。当日真野さんは、キャリーバッグの上に大きなポストバックを乗せて、ロケ先の松山から飛行機と新幹線を乗り継いで一人で豊橋にやって来られた。会場満席の中、講演が始まり美しい真野さんが登場、空想美術館にはいろいろな分野の作品があり、画像と共に紹介された。歯切れの良い口調でわかりやすく説明してくださり、その軽妙な話術に会場には笑い声も響き、彼女にすっかり魅了されてしまった。

「私の空想美術館」の連載は好評により、来年1年間続投されるとのこと。とても嬉しく思う。今年2月号以降に紹介された作品は、「昇りゆく天使たちの壁(ヤン・ファール作)」「乙女頭部(川端康成所有の古墳時代の埴輪)」「葡萄を収穫するアモールのタベストリー」「野菜のテリーヌ」「市川亀治郎の手」「スタンディング・ウーマン(ロン・ミュエク作)」「フロア・スタンド 葦と蜻蛉の装飾」「染付漆飾花東菊文蓋付大壺(有田焼)」「時の航海 木馬から天馬へ蜂がパイロットの偵察機」など、美術作品のみならず料理や人間の手までもが登場する。この多彩な作品選定には真野さんの柔軟な感性が表れており、解説も作品の写真も見ごたえがあった。最後に真野さんは、「さまざまな角度から美術館を楽しんで下さい」と締めくくられた。

このシンポジウムをきっかけに、多くの方々に、魅力ある美術館、新しい美術館の可能性を考えていただけたらと思う。



パネルディスカッション

●それぞれの館の特徴や取組みについて

金原館長(豊橋市) 美術や歴史に広く親しんでいただこうと、開館当初から常設展は無料である。企画展もバラエティに富んだジャンルを扱い、海外展も含めニーズの高い企画も開催していきたい。しかし展覧会だけでなく、学芸員の仕事としては調査研究が大切。郷土作家を中心に美術史を再検討することも忘れないよう留意している。普及活動にも積極的に取り組み、ワークショップやコンサート、ボランティアガイドによる作品解説などを行い、多くの人々が楽しめるよう努め、市民が必要だと思う美術博物館をめざしている。私の方針は、職員全員が美術博物館の「広報マン」たること。

増田館長(浜松市) 市町村立としては全国で8番目にできた美術館。開館して38年になる。市民が建設資金を集め、ガラス絵、浮世絵、大津絵など民画のコレクションから始まり、中国・朝鮮の陶磁器や石仏・金銅仏のコレクションの寄贈も収蔵品の特徴となっている。開館当初から版画の全国公募展を開催、振興に寄与してきた。商店と協力し街中に子供たちの絵を展示したり、野外や廃校で美術展を開いたり、夜のイベントやジャズコンサートを企画するなど、美術館外でのアート活動の支援を行い、愛好者を増やす活動も重要。いよいよ新美術館建設を進めることになり、現在基本構想を策定中。

滝沢館長(飯田市) 昭和63年に開館し、20周年を迎えた。基本テーマは「伊那谷の自然と文化」「自然と人間の融合(フュージョン)」。伊那谷の自然に恵まれ、昔から芸術・歴史・文化が栄えた土地。日本画の巨匠・菱田春草と博物館の父・田中芳男の生誕の地でもある。春草を中心に優れた作品を収集。美術部門のほか自然部門、人文部門と幅広い領域の文化施設である。市民の皆さんと協力し、調査・研究・収集・交流の場となることをめざしている。

●利用者の立場から、魅力ある美術館とは？

神野 街の特徴とフィットし、コンセプトもはっきりしている美術館がよい。長崎県美術館やスペインのビルバオ・グッゲンハイム美術館は街に溶け込み、社会とつながっている好例。ひとつの作品、ひとつの美術館で街が変わることがある。どういう街や美術館にしたいのか、地域との関係を考え議論する必要がある。

真野 常設作品に目玉があり、企画展が面白いこと、建物が主張しすぎないことが条件。鑑賞中にはいい所で椅子や飲み物がほしい。収蔵品の購入は100年もつ作品か考えて買うべき。市民や土地の人がその街を

楽しんでいれば、旅行者にとってもその美術館は楽しいはず。好きな絵の前で結婚式が挙げられる美術館もあり、市民レベルで関心を持ち、利用の仕方を工夫し、議論すること。友の会に入ることも大事。美術は喜びであり、こやしになる。見極める目、観る力を養い、良い物をつかんでほしい。

シンポジウムに参加して

加藤浩子(1037)

日頃の疲れを癒したいと軽い気持ちで聞いていたシンポジウム、原稿依頼など予期していなかった私ですが、思うままに感想を記します。

第1部の真野響子さんの基調講演「私の空想美術館」での歯に衣着せない話しぶりは、さすがと共感することばかりでした。

第2部の「魅力ある美術館とは」のパネルディスカッションでは、豊橋・浜松・飯田の各市の美術館長がそれぞれの館の特徴や独自の取組みについて丁寧に話されました。市民代表の神野吾郎さんは、海外の美術館のように街とつながりを持つような美術館をと話され、若さと未来を感じました。真野響子さんは、芸術作品を見る目を養うことの大切さを強調されました。

私たち友の会の会員は、鑑賞する力をつけることだと痛感いたしました。それには、いろいろな美術館に足を運び多くの美術に接すること。そうしているうちに、自然と知識が豊かになり、感性が磨かれていくのだと思います。一人ひとりの努力がすばらしい美術館にする原動力となることを願います。まず家庭から、特に子供に良いものを見せたいと思う親の愛と、豊かな心を育む家庭こそ美しい日本の文化の原点であると思います。

響き合ふ シンポジウムや 文化の日 浩子

友の会の研修旅行について考える

前号は「会員拡大について考える」をテーマに取り上げ、寄せられたアンケートには「本音が語られていて読みごたえがあった」「座談会には友の会役員や学芸員だけでなく、行政や一般会員も含めたらどうか」「若い世代にもっと文化や芸術に関心を持ってもらうために、高校に積極的に働きかけて会員を増やす努力をしたいもの」などの声がありました。

今回のテーマは「研修旅行」です。昭和62年から始まった研修旅行は、今秋で54回となりました。オーストリア、フランス、ドイツ、イギリス、アメリカ、中国など5回の海外研修、24回の宿泊研修、25回の日帰り研修で、延べ3,278人も参加があり、友の会事業の中でも好評を博しているものですが、ここでは募集のチラシには載らない研修旅行の舞台裏を取材し、その実態に迫ってみました。インタビューに答えてくれたのは、研修旅行担当部長の富田真知子さん、同じく前部長の須見テル子さん、宮田正人友の会会長です。

〈訪れた主な美術館〉豊田市美術館、愛知県陶磁資料館、三岸節子記念美術館、かわら美術館、杉本美術館、かみや美術館、刈谷市美術館、荻須記念美術館、メナード美術館、名都美術館、浜松市美術館、資生堂アートハウス、ねむの木こども美術館、静岡県立美術館、芹沢銈介美術館、東海道広重美術館、三重県立美術館、パラミタミュージアム、岐阜県美術館、青柳記念館、加藤栄三・東一記念館、飯田市美術博物館、碓山美術館、美ヶ原高原美術館、北澤美術館、マリー・ローランサン美術館、長野県信濃美術館、信濃デッサン館、無言館、安曇野ちひろ美術館、松本市美術館、軽井沢メルシャン美術館、佐久市立近代美術館、富弘美術館、山梨県立美術館、池田20世紀美術館、ベルナルド・ビュッフェ美術館、中川一政美術館、彫刻の森美術館、成川美術館、横浜美術館、神奈川県立近代美術館、葉山館、鎌木清方美術館、ポーラ美術館、武相荘、日本民藝館、国立新美術館、石川県立美術館、金沢21世紀美術館、大原美術館、和歌山県立近代美術館、京都府文化博物館、京都国立博物館、サントリー大山崎山荘美術館、竹内栖鳳記念館、奈良県立美術館、奈良国立博物館、松柏美術館、滋賀県立近代美術館、MIHOミュージアム、滋賀県立陶芸の森、福井県立美術館、兵庫県立近代美術館、小磯記念美術館、大塚国際美術館、直島地中海美術館、猪熊弦一郎現代美術館、イサムノグチ庭園美術館、東山魁夷せとうち美術館、北海道立近代美術館

①今までの研修旅行の評判、評価をどのように受け止めていますか。参加者からはどんな感想や希望がありますか。

「今春の金沢研修は、1日目は21世紀美術館、石川県立美術館、2日目は自由に街を散策する企画でした。アンケートを見ると、見残した方はもう一度21世紀美術館へ行き、そうでない方はレンタル自転車ですぐ街をゆっくり見て回ったり、みなさん2日間を十分楽しまれたようです。会員同士の親睦にもなりましたという声もあり、「ゆっくり」「自由に」が好評でした。」

「豊橋市美術博物館友の会の研修旅行ということで、訪問先の美術館で館長や学芸員の方に丁寧に説明していただけるのは魅力の一つです。時には館の学芸員が同行し、バスの中で説明を聞いたり、個人的に質問できるところも他とは違う楽しさです。バスの中は禁酒・禁煙・禁カラオケが好評。」

②当初と最近では、研修旅行に変化はありますか。また、どんなことに配慮されていますか。

「当初は同じ企画を平日と日曜の2回開催することが多く、案内する役員は二手に分かれて忙しかったです。企画がハズレて参加者が少ないときにも役員が駆り出され、何かと大変でした。一泊旅行の宿泊先は、和風旅館などの大部屋は不評で、最近ではホテルのシングルが基本になっています。」

「新しい美術館、素敵な企画展など、その時々々の情報を入手し研修旅行として企画してきました。申込みが多くバス2台に増便する旅行も何度かありましたが、それは会員ニーズを捉えていたということだと思います。当初は美術館巡りがメインで、ひとつの美術館に滞在する時間が短く慌しいツアーもありました。最近では、ゆっくり楽しめる研修旅行をめざしています。」

「02年から研修旅行を担当しましたが、他のツアー旅行にはないプレミアムな魅力を創出し、参加者に満足いただける企画を心がけてきました。たとえば、①訪問先の美術館での学芸

員の専門的な解説 ②個人旅行では入場できないような場所に入り、特別な美術品が鑑賞できる ③美術館だけでなく名所旧跡、歴史的建造物も見学する ④宿泊ホテルのグレードは高く料金は割安で、かつ美味しい料理を食べる、といったことなどです。また、バスの中で美術のビデオを見たり、学芸員の方に事前の勉強会を開いていただいたり、予備知識を持つことで研修をより一層楽しめるような工夫をしました。」

③心に残る研修旅行はどこですか。

「03年の瀬戸内海・直島への研修旅行は、1年前にホテル(美術館を兼ねた「ベネッセハウス」)を予約して全館貸切にできたので、会員だけで気兼ねなくゆっくり見学ができ、参加者同士の親睦も図れました。06年には2泊3日で北海道の野田弘志画伯のアトリエを訪ね、その交流が地元紙に大きく取り上げられました。5回の海外研修では世界の主な美術館を巡り、必ずオペラも鑑賞し、本物の迫力に感動してきました。特にアメリカ研修は、豊橋の姉妹都市トリードを訪ね、トリード美術館で開催された「豊橋市美術博物館所蔵品展」(交換展)のオープニング式典に豊橋を代表して参加したことが心に残ります。」



トリード美術館で挨拶をする原前会長

「豊橋市美術博物館友の会の方針と行動」 その2



モエレ沼公園(北海道)

④今後の研修旅行の目的や趣旨をどのように考えていますか。
「豊橋の新美術館(増築案も含めて)に必要なデータ収集の機会として研修旅行を据え、今後の友の会活動の参考にしたいと思います。他の市立美術館・博物館を積極的に選択して見学し、美術博物館の方向性を模索し検討する活動につなげていければと思います。37万都市に見合った無理のない美術館でよいのです。多くの人の共感呼び、愛される「私たちの街の美術館」をめざし、その魅力や活動を友の会の会員からも発信できるといいですね。」

「友の会の会則に、「豊橋市美術博物館事業に協力し、会員の教養を高めるとともに相互の親睦を深め、文化の向上を図ることを目的とする」とあります。研修旅行を通じ他の美術館を見ることで、私たちの豊橋市美術博物館の利用モチベーションが高まり、協力関係が強まると考えています。」

⑤主催者としては何がおもしろいとお考えですか。

「『私たちの街の美術館』だったら、という視点で研修旅行に参加すると美術館の見方も変わってくるかもしれません。それもおもしろいと思います。いろいろな美術館を訪れ、運営方法、展示方法などを知ることで、豊橋の美術博物館の方向性に各人が希望や理想を持ち、その意見を集約していくというのはいかがでしょうか。そのために毎回参加者のご意見やご要望をアンケートでお聞きしています。今後、アンケート設問の内容も再考し、新しい美術館構想への参加の意識を自然に高めていく方法を検討していかなければと思います。(あくまでも楽しみながら、めんどくさいと感じない方法で)」

⑥研修旅行を企画し同行することの、悩みや苦勞はどんなことがありますか。

「会員の年齢層が幅広いので、みなさんが参加できる企画を考えるのは大変難しいことです。なるべく大勢の方に参加のチャンスがあるように、春と秋の日程を平日と週末でバランスを考慮して設定するなどしています。」

「参加者が予定より少なかったらどうしようか、申込みが多すぎたらバスを増やすのか、お断りするのか、毎回悩みます。魅力ある新鮮な企画を提案したいと常に思っていますが、段々とマンネリになっていないかなどの不安もあります。」

「役員も参加費を払い、ボランティアで案内させていただいて

いるのに、同じ仲間ではなく添乗員扱いされて、情けない思いをしたこともありました。あとは、やはりグレードの問題が企画の悩みにて試行錯誤してきました。コストだけで考えると満足感が薄れることもあり、かといって高額になれば敷居が高くなる。担当者の悩みです。」

⑦参加される方に何を望みますか。

「『老いも若きも一緒に旅するおもしろさ(同好の士)』が友の会の信条です。会員同士、一緒に楽しむこと。単なる募集バス旅行とはひと味違ったおもしろさを体験していただきたいと思ひます。」

⑧これからの研修旅行をどんな風にしていきたいとお考えですか。

「美術館だけでなくその背景としての街も知り、その街ごと楽しむ研修旅行はいかがでしょうか。若い方にもっと参加してほしいですし、若い方にも魅力を感じてもらえるような企画を考えていきたいと思ひます。」



直島・ベネッセハウス(香川県)

⑨今後の具体的なプランがあれば教えてください。

「アンケートでは、鳥根県立美術館・MIHOミュージアム・群馬県立美術館・足立美術館・バラミタミュージアムなどが希望として挙がっています。建築家・隈研吾の手でリニューアルされた根津美術館も候補です。近隣では、三岸節子記念美術館・豊田市美術館も企画展によってはよいと思ひます。今秋は松本でしたので、来春は少し足を延ばして1泊で行けるところを計画しています。」

候補1 出雲・松江方面(出雲大社、出雲歴史博物館、足立美術館、鳥根県立美術館、松江の街など)

候補2 青森・弘前方面(青森県立美術館、棟方志功記念館、三内丸山遺跡、弘前城、弘前の街など)

研修旅行についての特集はいかがでしたか。今まで参加したことのある方も、これから参加される方も、今までの研修旅行、そしてこれからの研修旅行についてどんな風に感じられましたか。この特集の感想、そして研修旅行への希望をどうぞアンケートでお寄せ下さい。前号のアンケートは7通でした。私たちも意見を言い、情報を発信しています。あなたも声を出し、私たちに情報を発信して下さい。次号では友の会が主催するコンサートなどイベントについて取り上げる予定です。この企画についてもご意見をお寄せ下さい。(風伯編集部)

～“あの作品”がやってくる～

愛知県美術館平成21年度移動美術館「ひかり・いろ・かたち」

2010年2月20日[土]～3月28日[日]《入場無料》

休館日：月曜日（ただし3/22(月・祝)は開館、23日(火)は休館） 開館時間：午前9時～午後5時（初日は午前10時30分開館）

主催：愛知県美術館、(財)愛知県文化振興事業団、豊橋市、豊橋市教育委員会

愛知県美術館の所蔵作品を県内の施設で紹介する「移動美術館」が、1997年より毎年行われていることをご存じでしょうか？豊橋市美術博物館が開館30年を迎えた本年度、いよいよ愛知県美術館の名品が豊橋にやってきます。

じつは、両館の交流は「移動美術館」よりも古く、愛知県文化会館美術館時代の1980年から89年まで（88年は除く）、豊橋市美術博物館ではほぼ毎年「愛知県美術館所蔵品展」を開催していました。20年ぶりの開催となる今回は、「ひかり・いろ・かたち」のテーマのもと、絵画から彫刻まで幅広くご紹介します。

光に満ちあふれた光景、豊かな色彩と独自の形象を追求した具象・抽象絵画をメインに、近現代の彫刻家による「かたち」の多様性もご覧いただけます。

また、オープニングイベントとして「美術のたのしみ」と題した両館館長による対談を開催するほか、両館の学芸員によるギャラリートーク、チェロとピアノによるロビーコンサートなどイベントも盛りだくさんです。あわせてお楽しみ下さい。



瑛九《黄色い花》1957-58年



舟越 桂《肩で眠る月》1996年

関連イベント

記念対談「美術のたのしみ」 事前申込不要、参加無料

○2月20日(土)午前11時～12時

○牧野研一郎(愛知県美術館長) 金原宏行(豊橋市美術博物館長)

展示説明会(ギャラリー・トーク) 事前申込不要、参加無料

愛知県美術館と豊橋市美術博物館の学芸員が会場にて作品について話します。

①3月7日(日) ②3月14日(日) 午後2時～3時

ロビーコンサート 先着100名、参加無料

展示作品と関連した曲目を演奏します。

○3月22日(月・祝)午後2時～3時

○チェリスト 天野武子(愛知県立芸術大学教授)、ピアノ伴奏 渡辺理恵子

新春遊戯 凧・独楽展

12月12日[土]～1月17日[日]

休館日：月曜日（ただし1/11(月・祝)は開館、12(火)は休館）、12/29～1/3 開館時間：午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

江戸時代の浮世絵にも描かれている子どもの正月遊びといえば、「凧揚げ」「独楽回し」に「羽根つき」。正月の風物詩ともなっていました。

凧揚げや独楽回しは、江戸時代から昭和まで男の子の外での遊びとして人気があり、正月になると空き地や野原で元気に遊ぶ子供たちを目にしたものです。しかし最近では、外で遊べる場所が少なくなり、また、ゲーム機の普及もあって、この正月の風物詩もあまり見られなくなりました。

本展では、美術博物館の大口コレクションの中から、全国各地の様々な凧や独楽を紹介いたします。また、豊橋凧保存会・田原凧保存会のご協力により、豊橋凧、田原凧の展示もあわせて行います。次の正月は、童心にかえって懐かしい凧や独楽で遊んでみてはいかがでしょうか。



〈孫次凧〉大口コレクション



〈競争ごま〉大口コレクション

マンチェスターより、豊橋のみなさんへ

この夏「ターナーから印象派へ」展で、作品点検のために豊橋を訪れたイギリスの二人の学芸員から手紙が届きました。

マンチェスター市立美術館

サンドラ・マーティン

豊橋への訪問は、私にとって忘れられない経験となりました。温かく親切な人々と出会い、今も大切な思い出です。梅雨の季節でしたが、時折のぞく晴れ間に街を歩き、素敵な建物も見つけました。ベリ美術館の学芸員と一緒に路面電車で郊外へ出かけ、川辺を散歩しました。そこでは鯉の群れやイギリスとは少し違った生き物を見かけ、楽しいひと時を過ごしました。また、美術博物館はとても美しい公園の中にあり、館も公園もきちんと整っています。スタッフはみんな気配りの行き届いた親切な人ばかりで、私はこれほど手厚い歓迎を受けたことがありません。

当館は「ターナーから印象派へ」展へ14点出品しましたが、中でも2点は特筆すべきものです。まず1点は、エリザベス・アデラ・フォーブズの《ジャン、ジャンヌ、ジャネット》。おもしろい題名だと大いに注目を集めました。これは描かれている少年と少女と山羊の名前で、フランス人が性別と年齢を表すために男性の名前の語尾を変化させる慣習を、画家が遊び心



フォーブズ
《ジャン、ジャンヌ、ジャネット》

でつけたものと思われま

す。もう1点は、当館の目玉、ピサロの初期作品である《ルーヴシエンヌの村道》。1872年にマンチェスターの実業家が購入し、イギリスに渡った最初の印象派作品として記念すべきものです。

この展覧会を楽しんでいただけましたでしょうか。豊橋のみなさんの良き思い出として心にとどめていただければ幸いです。

ベリ美術館

キャサリン・マクラン-オークス



サンドラ(左)とキャサリン(右)

豊橋で深く心に残るのは、地元料理を存分に堪能したこと。特に「ちくわ」と「桜えび」が最高でした。日本には何度か訪れていますが、刺身も今まで味わった中で一番おいしかったです。でも、それ以上に好きになった料理があります。それは「にかけうどん」です。「オイシイ〜!!」。館のスタッフのおかげで豊橋の様々な料理を味わうことができました。豊橋のみなさんは親しみやすく親切な人ばかり

で、温かく迎えてくださったことを心より感謝しています。

ベリ美術館は56点の油彩画と水彩画を出品しました。油彩画は日本に搬送する前にクリーニングを行い、ベストなコンディションでご覧いただけるようにしました。中でもエンドウ・ランシアの《乱射》は、画面洗浄によって背景の雪と空の深みと繊細さがよみがえり、すばらしく鮮明になりました。ヴィクトリア女王とアルバート公の依頼によって制作された作品ですが、残酷すぎるという理由で、結局王室コレクションには入りませんでした。

実際に所有したのは、地元の製糸業者トーマス・リグリー氏で、彼が死去した際、遺族がそのコレクションを取容するための美術館を建てる条件をつけて作品を町に寄贈しました。それによって1901年にベリ美術館が開設されたのです。今回出品した作品の過半数は彼のコレクションです。本展が、豊橋とマンチェスターの架け橋になったことを大変うれしく思っています。



ランシア《乱射》

普及イベント すきな絵をえらぼう！

友の会役員のみなさんのご協力により、豊橋まつりで豊橋公園に集まった子供たちに、三遠南信交流展「ミュージアム・サミット 美の競演」を見学してすきな絵を選んでもらうイベントを開催しました。

小学生120名、中学生35名、小学生未満9名の合計164名の参加があり、そのうち、46%にあたる76人は今回初めて美術博物館を見学したそうです。これからも、子供たちが美術や歴史に親しみきっかけとなるような活動を地道に続けていきたいと思

第1位 「春夏秋冬の春」岡田徹

第2位 「アフガニスタン風景」秋野不矩

第3位 「路・波の国から」平松礼二



岡田徹《春夏秋冬の春》 浜松市美術館蔵



参加した子供たち

収蔵品紹介

 しょう えん きゆう ゆう す
 [渉園九友図]

渡辺小華 ● WATANABE, Shoka

明治7年(1874) 絹本着色 142.3cm×69.8cm
平成15年度購入

豊橋の人にとって渡辺小華は最も身近な画家のひとりであろう。

高度経済成長期以後はそうでもないが、それ以前には多くの家庭に床の間があり、掛け軸は数多くの需要があった。大正生まれの私の祖母も「小華さま」と尊敬と親しみを込めてその名を呼び、小華が描いたという鍾馗の絵を大事そうにみせてくれた。その絵は落款もない粗末なもので、高校生の目からみてさえも、眉つばものであることが一目瞭然であったが。

小華は天保6年(1835)に田原藩家老職渡辺峯山の次男として江戸に生まれた。名は諧。父峯山が蛮社の獄で蟄居後自害したのは諧が7歳の時である。13歳で峯山の弟子椿椿山の画塾に入門して花鳥画を研鑽、幕末維新时期は田原藩の重職として藩務に奔走した。明治7年(1874)豊橋に移住。同10年から吉田神社の一画に居を構えたのち、15年に東京へ移住するまでの数年を「百花園時代」といっている。ここで文人や画家と交流するとともに、多くの門人を育てた。この時期には明治6年のウィーン大博覧会、10年の第1回内国勸業博覧会、15年の第1回内国絵画共進会へ出品するなど画家としての名声が高まり、数多くの作品が残されている。

この作品では、木蓮・牡丹・水仙・菊・芙蓉・梅・蓮など明るい色調の花々が、蛇行する曲線のなかに配置されている。明治7年の初夏、豊橋移住の少し前に描かれたもの。「甌香館おうこうかん渉園九友之法にならう」とあるが、甌香館は憚南田うなんだんの室号である。師椿山も傾倒した清朝前期の画家で、輪郭線を用いない没骨画法による着色の花鳥画を得意とした。

年末から年始にかけ、本作を含む収蔵資料によって渡辺小華とその周辺の画家を紹介する。

(豊橋市美術博物館学芸員 増山真一郎)



編集後記

11月3日、待望のシンポジウムの会場に現れた真野響子さんは、小気味いいテンポの知的で美しい方。けれど、本当の魅力が発揮されたのは講演が始まってからでした。自身で内面を造形してきた自信と優しさがことばから伝わり、本物だけを許容する強さを貫いてきた潔さがあふれます。スパイシーな発言にも同調した拍手と歓声が起こりました。魅力ある美術館が欲しいなら「市民の力で、工夫して考えなきゃ」。喚起のことばです。

本物の美術があれば人生はどうなる？豊かさを創るって何をすればいいの？何を变えれば身近な美術館になる？本当に望んでいることって何？たくさん考えないとイケません。豊橋の街に素敵な美術館があることを楽しみ、誰もが日常生活の動線に組み入れたくなる美術博物館を望んでいます。女も男もいっぱい感じて考えてこそ、美しく魅力的になれる気がしてきました。

(福島陽子)

【表紙作品】

渡辺小華《蓮池白鷺之図》(部分)

明治8年(1875) 紙本墨画 136.2cm×76.5cm

豊橋市美術博物館蔵

常設展(11/21～1/24)より

豊橋市美術博物館 友の会だより「風伯」第74号

編集・発行 豊橋市美術博物館友の会

会長 宮田正人

担当副会長 神野能生子

編集長 鈴木伊能勢

編集委員 福島陽子 全田順子

協力 豊橋市美術博物館

〒440-0801 豊橋市今橋町3-1 TEL.0532-51-2882

平成21年11月20日発行(5月・8月・11月・2月各20日発行)

平成10年3月17日 第3種郵便物認可 定価200円

※会員は会費に含みます。※定価には消費税が含まれます。